

主 題：七つの教会への使信3、ペルガモ教会—世俗化してしまった教会
聖書箇所：黙示録 2章12—17節

黙示録2章12節から見ていきましょう。もう、皆さんはお気付きになったと思いますが、この教会に宛てた使信、主のメッセージですが、だれがだれにこの使信を送るのか？そして、その中にはその教会の人たちに対する神からの称賛が記されており、同時に、神からの警告も記されています。神の約束が記されています。これまで私たちはエペソ教会、スミルナ教会を学んで来ました。今日は三つ目の「ペルガモ教会」について、神からのメッセージを go っしょに見ていきます。

1. 宛先 : ペルガモにある教会の御使い

12節「また、ペルガモにある教会の御使いに書き送れ。『鋭い、両刃の剣を持つ方がこう言われる。』」と書かれています。ペルガモの教会に宛てた神からのメッセージです。ペルガモはどのような町でしょう？簡単に背景を説明します。皆さん、それらの少しでも頭に留めておいていただきたいと思います。

紀元前282年、アレキサンダー大王の王国が分裂しました。そして、セレウコス朝が出来たときにこのペルガモがその首都になったのです。紀元133年にアッタロス3世が死去し、彼の遺言によってセレウコス朝はローマの属州になります。ローマはこの属州をアジア地方と呼んで、ペルガモがその地域の首都となりました。そして、約400年の間、ここが首都だったのです。

ペルガモはエペソやスミルナとは違って約24キロほど内陸に入っていたために、貿易や商業においては余り重要な町ではありませんでした。しかし、行政上は大変重要な都市であり、また、文化的にも非常に優れた都市であったと言われていました。この町にはエジプトのアレキサンドリアに次ぐ、20万冊の羊皮紙の巻物が貯蔵された図書館が存在しました。ですから、非常に政治的にも文化的にも優れた町だったのです。また、同時に、このペルガモについて見るときに忘れてはならないのは、宗教の中心地でもあったということです。様々な神々を崇拝する神殿が数多く存在しました。

2. 送り主 : だれがこの手紙を送っているのか？主が送っているのですが、主に関してこのように表現されています。『鋭い、両刃の剣を持つ方』とあります。1章の中に、主の声を聞いたヨハネが振り返ったときに見た主の御姿が、この送り主の説明に使われています。1:16に「また、右手に七つの星を持ち、口からは鋭い両刃の剣が出ており、顔は強く照り輝く太陽のようであった。」と、このように主ご自身がご自分のことを表わしておられます。「両刃の剣」とは「みことば」でした。みことばを「剣」という象徴をもって表わしています。というのは、みことばがもつ「力」や「働き」というものを説明しているのです。では、「みことば」はどのような働きを為すのか？「清め」の働きです。罪をさばき、その罪から清めるといふ働きです。すべてのことをご存じである主が正しいさばきをくだされる、そのことを改めてこの手紙の初めに記しているのです。主がどのようなお方なのか？ということです。

もう一つ、これは稀なケースですが、ローマはこのペルガモに死刑執行の権限を与えていました。ローマの許可を得ないで自分たちで死刑を執行することができたのです。そのことをこの「剣」をもって象徴しています。主はここで「両刃の剣」ということばを使うことによって、「剣」、死を恐れていた人たちに「剣」よりももっと恐れなければいけないものがある、恐れるべきは神の剣であると言わんとしたのです。ペルガモの教会に対して主は「両刃の剣を持つ方が」このメッセージを送ると言われたのです。

B. 主の評価 13—15節

この教会に対する評価が13節から書かれています。

*「知っている」 : 13節に「わたしは、あなたの住んでいる所を知っている。」とあります。すでに2:9節でも見ましたが、それぞれの教会にメッセージを送るときに、主は必ず「知っている」という動詞を使っています。それぞれのメッセージの文頭に出て来ます。それは強調されているのです。

1. 町の状況 : 13a節

ここでは主はこの町の状況をすべてを知っているといます。そして、この町の信仰者の信仰を知っていると、主はこのように言われるのです。

1) 多くの奴隷がいた : この町には多くの奴隷がいたようです。なぜ、そのことが分かるのか？この「住んでいる」という動詞の「住む」はいくつかのギリシャ語があります。よそ者としてそこに一時的に住むということを表わすことばがありますが、ここはそれではありません。これは「定住する」という意味のことばです。もう一つ、ここで使われていることばの接頭辞は「カタ」という前置詞で、「下に抑える」という意味があります。何を意味しているのか？自分から進んでペルガモに定住したのではなく、強制的にこの町に定住させられた人たち、奴隷たちのことです。恐らく、そのような人たちがこ

の教会にはたくさんいたのでしょう。

2) **サタンの王座があった** : また、「そこにはサタンの王座がある。」とあります。いったいそれは何だったのかは分かりません。言えることは、最初にも言ったように、この町には多くの偶像があったことです。サタンが町に影響を与えていたのです。どんな偶像があったのか？三つの偶像です。

・**ゼウスの祭壇** : 「ゼウス」という偶像の名をお聞きになったことがあるでしょう。ギリシャ神話のオリンポス山の神々の中で最も優れた神をゼウスと言いますが、ペルガモの人々は紀元前240年頃にゴール人に勝利したときに、それを記念してゼウスのために大きな祭壇を築いたと言われていました。もしかすると、それが主が言われる「サタンの王座がある」という意味かもしれません。

・**アクスレピオスの神殿** : アクスレピオスは「ペルガモの神」と言われていましたが、癒しを与える神として有名で、様々な国から多くの人々が苦痛や病気の癒しを求めて集まって来ていたのです。この神殿が主が言われた「サタンの王座」ではないか？とも言われます。その理由をバークレーはこのように説明しています。「実は、このアクスレピオスの表象、シンボルマークは「蛇」であったから、彼らの貨幣にもその蛇が模様の一部として刻まれている。クリスチャンたちには蛇はサタンを連想させるので「サタンの王座がある」と言ったのかもしれない。」と。

・**ローマの皇帝礼拝** : このペルガモは皇帝礼拝の中心地であったと言われていました。紀元29年にカイザル(シーザー)を祭る神殿を造ったと言われます。

ですから、はっきりと「これだ」とは言えませんが、このような偶像が存在したのでそれゆえに、主はペルガモの中に「サタンの王座がある」と言われたのかもしれませんが、少なくとも、サタンは確実にこの町において様々な働きを為していたのです。それはこれから見ていきますが、教会の中にも働きを為していました。

3) **厳しい迫害を経験していた** : 主がこの町に関して知っておられたことの三つ目は、彼らは「激しい迫害を経験していた」ことです。13節にアンテパスという名が出て来ます。ここから教えられることはアンテパスは殉教したことです。伝承によれば、人々は真鍮で作った雄牛の空洞の中に彼を押し込んで蒸し焼きにして殺したと言います。大変な迫害があったと見ることができます。信仰者であるゆえにこのようなことを経験したのです。主は「そのすべてを知っている」と言われます。アンテパスは死をもって主を証したのです。

2. 「彼らの信仰」を知っている 13b-15節

そのことが13節の後半から15節に書かれています。

1) 称賛に値するべきところ 13b節

迫害の中、信仰を捨てなかったこととあります。「しかしあなたは、わたしの名を堅く保って、わたしの忠実な証人アンテパスがサタンの住むあなたがたのところで殺されたときでも、わたしに対する信仰を捨てなかった。」とあります。

(1) **わたしの名を堅く保った** : 「堅く保った」とは「握る、掴む、強くある、何かを堅く所有する」という意味です。このことばが私たちに教えるのは「しっかりと継続して持ち続ける」ことです。2:25に「ただ、あなたがたの持っているものを、わたしが行くまで、しっかりと持っていなさい。」、3:11にも「わたしは、すぐに来る。あなたの冠をだれにも奪われないように、あなたの持っているものをしっかりと持っていなさい。」と同じことばがあります。

何をしっかりと持ち続けるのか？「わたしの名」とあります。ですから、彼らは主の名をしっかりと握り締めていたのです。皆さんは「わたしの名」「主の名」と言われたときに何を連想しますか？これは「イエスのすべてのこと」を指しています。主イエスに関するすべてのことです。「名」というのはその人のすべてを指すのです。ということは、イエスはだれであるのかを彼らは正しく知っていたということです。主が神であり、救い主であり、すべての被造物の主であると…。

ですから、このペルガモのクリスチャンたちは主イエスに対して正しい知識をもっていたのです。彼がだれなのかを知っていた。私たちもそのような信仰者でなければなりません。私は何を信じているのか？なぜ信じているのか？なぜ、それが真実だと言えるのか？だれかから聞いたから、教会でそのように聞いたから、信仰の先輩から聞いたから、それをただ信じていると、それでは皆さんの信仰は強くなっていきません。少なくとも、このペルガモのクリスチャンたちはイエスがだれであるのかについて正しい知識をもっていました。そして、その主に彼らはしっかりとしがみついていたのです。だから、その後続きます。

(2) **わたしに対する信仰を捨てなかった** : この「捨てる」とはクリスチャンが信仰を捨てる、未信者になると、そのように考える人もいますが、皆さんはどう思いますか？クリスチャンが未信者になることは可能ですか？あり得ないことです。なぜなら、救いは神が私たちにくださったものだからです。この「捨てる」というのは「否定する、否認する」という意味です。新約聖書に33回出て来ます。こ

れは「ある人とのあらゆる関係や関わりを否定する」ということです。つまり、このペルガモのクリスチャンたちは主イエスとの関係を否定することがなかったと言うのです。彼らは大変な迫害を経験していても「私はイエスを全然知らない。彼を知ってもいないし、彼は私の神でもないし、救い主でもない。無関係だ。」と言わなかったということです。もちろん、ペテロもそのような誘惑に遭ったときに自分の身を案じて「知らない」と言いました。私たちもそのようなことを経験することがあるでしょう。いろいろな儀式の中で、仏教の儀式の中で、自分はイエスを信じてイエスにだけ仕えていると言えなくて、「ちゃんと言えよよかったのに」と後悔することがあるかもしれません。残念ながら、私たちは弱い者です。ときに、恐れを抱いてしまいます。

でも、今言っていることは、心の中から「私はイエスとは無関係です。私はイエスなど信じていません。イエスは私の神でもないし救い主でもないし、私の主人でもありません。」と、そのように言うことが可能かどうか？不可能だということです。ここで使われている「捨てる」ということですが、マタイ 10：33では「しかし、人の前でわたしを知らないと言うような者なら、わたしも天におられるわたしの父の前で、そんな者は知らないと言います。」とあり、この「知らない」は同じことばです。ペテロは救いを失っていません。彼自身の保身のために彼は偽りを言ったのです。彼は本心からイエスのことを「全然知らない」と言ったのではありません。

ですから、パウロがこのように教えています。Iコリント 12：3「ですから、私は、あなたがたに次のことを教えておきます。神の御霊によって語る者はだれも、「イエスはのろわれよ」と言わず、また、聖霊によるのでなければ、だれも、「イエスは主です」と言うことはできません。」、主イエスによって救われた者たちは「主は私の神です。私の主です。」と告白するということです。神が救ってくださった人はそのように喜んで主を告白すると。ペルガモのクリスチャンたちは「イエスは私の主です。私の救い主です。」と告白して、自分たちの主への信仰を明らかにしていました。

***彼らは激しい迫害の中にあっても、主を信じて、信頼をおいて歩み続けました。彼らは「カイザルは主」と言うことを拒み続けました。そして、継続して「イエスは主」と言い続けたのです。**

実は、この「捨てなかった」という動詞の時制は「不定過去」です。それは「過去の事実を明らかにした」、その目的でこの時制を使ったのです。いったい、どのようなことがあったのか？その詳細については知らされていませんが、確かに、彼らはあることを経験していたのです。彼らは確実に主イエスを否むようにと迫害を受けていたのです。「主を知らない」と言うように、主から離れるように、主を捨てるようにという迫害です。そのことをこの時制が明らかにしています。詳しいことは分かりませんが、彼らは大変な迫害を経験していました。でも、その中であって、彼らは主を否むことがなかった、信仰を捨てることがなかった、主イエスを知らないと言うようなことはなかったのです。彼らは「主は私の主であり、私の神です。」と言い続けていたのです。

先にも見たように、ローマは国家の統一を図るためにある一つのことを命じました。それは年に一回、ローマ市民は必ず、皇帝を祭る神殿に礼拝をしてカイザルの像に香を焚いて「カイザルは王である」、「シーザーは主である」と告白することを要求されたのです。それによって、このローマを一つに治めていこうとしたのです。でも、ローマはこれを宗教にしてそれに逆らう者たちをどうしようとは思っていません。これはあくまでローマに忠誠を示す政治的な行為であったと言われていています。ローマは皇帝礼拝を唯一の宗教とする意図は持っていませんでした。ローマ市民は「シーザーは主である」と告白しさえすれば、社会の安寧と秩序を乱さない限り、自由に他の神を礼拝することができました。

しかし、クリスチャンたちは「シーザーが主である」とは絶対に言えませんでした。なぜなら、クリスチャンにとっては、ただ主イエス・キリストだけが主であり、他の何ものも主と認めることはできなかったからです。そこで、ローマ政府はこの立場を理解することができないで、クリスチャンを不忠の民、革命分子と見做して民権を剥奪したのです。このようなことがあったのです。この当時のことが少しお分かりいただけたでしょう。私たちが理解しなければいけないのは「その当時のこと」です。このような中で彼らはその信仰を捨てることがなかった、主イエスを否定することがなかったのです。その中であってしっかりと主イエス・キリストに対する信頼と信仰を保ち続けたのです。

なぜ、そのようにできたのか？なぜ、彼らはイエスだけが主であると告白し続けることができたのか？先ほども見たIコリント 12：3に書かれていたように、主ご自身が、私たちに内住してくださる主ご自身が、聖霊なる神ご自身がそのように私たちに告白させてくれるのです。ですから、神によって救われた人は「私はイエスさまとは無縁です」とか「イエスさまは私の神ではありません」と、神を否定することは絶対にあり得ないことです。もし、彼らが主からその救いから信仰から離れてしまうなら、ヨハネが教えるように、彼らはもともと救われていなかったということです。神によって救われた人たちはこの主から離れることはないのです。彼らが救われていることの証拠、それはこの13節のみことばが明らかにしています。大変な迫害の中にあっても彼らは信仰を捨てることがなかった。イエスを否む

ことがなかった。そして、彼らはイエスに従順に従っていったのです。確かに、主は彼らの主であられたということを彼ら自身の生き方が明らかにしています。それは彼らが「救われていた」からです。

少なくとも、このペルガモの教会のすばらしい信仰の様子をこのように見て来ました。ところが、この教会にも問題がありました。サタンの働きがあったのです。

2) 非難するべきところ 14-15節

14-15節「:14 しかし、あなたには少しばかり非難すべきことがある。あなたのうちに、バラムの教えを奉じている人々がいる。バラムはバラクに教えて、イスラエルの人々の前に、つまずきの石を置き、偶像の神にささげた物を食べさせ、また不品行を行わせた。:15 それと同じように、あなたのところにもニコライ派の教えを奉じている人々がいる。」

(1) **バラムの教えを奉じている人たちがいた** : そして、ニコライ派の教えを奉じている人たちがこの教会の中にいたということのみことばは言っています。この箇所が私たちに教えていることは、教会の敵、信仰の敵は教会の外にもいますが、このペルガモの教会は教会の中にも敵がいたのです。教会の中であって、このような誤った教えをもって人々を間違った方向に導こうとした人が存在していたこと、また、そのような人たちの存在を許していた、それがこの教会の問題だったのです。

この「バラムの教え」とは、実は、民数記22-25章にその詳細が記されています。今、皆さんに見ていただきたいのは、新約聖書の二箇所から「バラムの教え」とはどういうものであったのか？バラム自身がどういう人であったということです。Ⅱペテロ2:15「彼らは正しい道を捨ててさまよっています。不義の報酬を愛したベオルの子バラムの道に従ったのです。」、彼は「不義の報酬を愛した」とあります。確かに、その様子は民数記に書かれていますから、皆さん後でじっくり読んでください。もう一箇所はユダ1:11です。「ああ。彼らはカインの道を行き、利益のためにバラムの迷いに陥り、コラのようにそむいて滅びました。見てください。」、バラムは「神よりも自分の利益を優先した」人でした。そして、これらを頭に入れながら民数記31:16を見てください。「ああ、この女たちはバラムの事件のおり、ベオルの事件に関連してイスラエル人をそそのかして、【主】に対する不実を行わせた。それで神罰が【主】の会衆の上に下ったのだ。」とあります。ここで注目していただきたいのは「不実」ということばです。忠実でない、不誠実な、不信ということばです。

イスラエルは神の前に忠実でなかったのです。彼らは神に逆らったのです。彼らがどんなことしたのかが民数記25:1-3に記されています。イスラエルはシティムにとどまってモアブの女たちとの間で淫らなことをし始めた様子が書かれています。「:1 イスラエルはシティムにとどまっていたが、民はモアブの娘たちと、みだらなことをし始めた。:2 娘たちは、自分たちの神々にいけにえをささげるのに、民を招いたので、民は食し、娘たちの神々を拝んだ。:3 こうしてイスラエルは、パアル・ベオルを慕うようになったので、【主】の怒りはイスラエルに対して燃え上がった。」、このさばきによって2万4千人のイスラエル人が死を経験します。そのことを頭に描きながら今日のテキストに戻ってください。

主は私たちに、今見て来たことを分かり易く要約してくれています。14節「あなたのうちに、バラムの教えを奉じている人々がいる。バラムはバラクに教えて、…」とあります。覚えていますか？バラクという指導者は、イスラエルが様々な敵に打ち勝っている様子を見て、これは勝ち目がないと思って預言者バラムを呼んで来ます。バラムに願ったことは「イスラエルをのろってください。そうすれば私たちは勝利を得ることができるでしょう」でした。確かに、民数記にはそのことが詳しく記されていないのですが、ここで主は「バラムはバラクに教えた」と言われています。何を教えたのか？「イスラエルの人々の前に、つまずきの石を置き、偶像の神にささげた物を食べさせ、また不品行を行わせた。」

***バラムは、イスラエルの人々の前につまづきの石を置くことをバラクに教えた。すなわち、イスラエルの人々が罪を犯すための罠を仕掛けることを教えた。**

バラムは「イスラエルの神に勝とうとするのなら、イスラエル人は唯一真の神を信じその方に従っているけれど、その信仰を乱せばいい、偶像崇拜をさせたらいい、不品行を行わせたらい。そうすれば神の祝福が無くなって彼らは敗北する。」と言うのです。実は、この預言者バラムはこのようなことをしたのです。彼は「つまずきの石を置いた」とあります。イスラエルの人々が罪を犯すための罠を仕掛けたと言っているのです。なぜ、敢えて「罠」ということばを使ったのか？実は、「つまずきの石」ということばには「罠」という意味があるのです。ですから、「つまずきの石」は「罠」を表わしています。

今はこのようなことを見たことも聞いたこともありませんが、私が子どもの頃はやっていたのです。ザルを持って来てその一片に棒を突き立ててその下にお米を置いておくのです。余りにも古い話ですが、そうしてそこに雀がやって来て米をついばんでいる時にその棒に振れたらザルが覆い被さって雀を捕まえるということです。そのような意味をもったことばです。バラムがしたことは、このイスラエルの人たちが罪に陥るように罠を仕掛けることでした。イスラエルの人たちを罪へと誘惑して、その結果、彼

らが神からの祝福を失うようにと、まさに、バラクの望んだことがこのイスラエルの上に起こるのです。

・どのような「不実」（民数記 31 : 16）を行なったのか？

a) 偶像にささげた肉を食べた : 人々は偶像の神にいけにえをささげますが、その肉の一部は焼いてささげ、一部は自分たちが食べたのです。そして、もう一部は他の人たちが持って帰って家で食べるようにと販売したのです。その肉のことです。多くの人たちは神殿に行って、偶像にささげた肉を買って帰って自分の家で食べたのです。イスラエルの人たちは「それは汚れている」と言って嫌いました。でも、それをさせたところに記されています。

b) 不品行 : 民数記 25 : 1-3 で見たように、モアブの娘たちとの間に性的不道德な罪を行わせたのです。

どちらもしてはならないことでした。異邦人が救われた時に、使徒たちはエルサレムに集まって来ました。使徒の働き 15 章に書かれています。エルサレム会議と言われているものです。その中でヤコブがこんなことを使徒たちに言っています。使徒 15 : 19-20 「:19 そこで、私の判断では、神に立ち返る異邦人を悩ませてはいけません。:20 ただ、偶像に供えて汚れた物と不品行と絞め殺した物と血とを避けるように書き送るべきだと思います。」、これが使徒たちの決定だったのです。異邦人たちがユダヤ人と同じように救いに与った様子を見て、彼らが気を付けなければいけないことは、「偶像に供えて汚れた物を食べてはいけないということ」、そして、「不品行を行ってはいけない」であって、このことを教えなさいと言うのです。まさに、彼らがしていたことは神がしてはならないということだったのです。このようなことを教会の中で教える人、バラムの教えを奉じている、そのような人たちがいたということです。

(2) ニコライ派の教えを奉じている人々がいた 15 節

今、私たちは日本語の聖書を見ていますが、この 15 節の直訳では「そしてまた、あなたのところにいるあなた、放棄しないで堅く保つ」と書かれています。ここでは「あなた」ということばが 2 回繰り返されていることを皆さんに知ってもらいたいのです。なぜなら、「あなた」を強調することによって、このペルガモの教会に対する主の悲しみというものを表しているからです。

ペルガモ教会はすばらしい教会だと見て来ましたが、でも、非常に悲しむべきことがあったのです。

*** エペソ教会では、ニコライ派の人々の行いを憎んでいたが、ペルガモ教会では、憎むどころか、その教えを受け入れ、また、それを教えている人を赦していた**

ということです。どのような教えであったのか詳しいことはよく分かりませんが、こと 2 : 6 に記されています。恐らく、バラムの教えと類似していたであろうとされています。14 節に書かれているように、偶像にささげたものを食べさせることや、不品行を行わせることへの奨励を教えるようなものであったろうと言われます。

この二つの教えはどちらも神のみことばに逆らうようにと誘惑するものでした。これはすでに見たことですが、レオン・モーリスはバークレーのことばとして「この教えはキリスト教を滅ぼそうとしているのではなくて、キリスト教を改良し現代風にしたものを提示していた。」とそのように説明しています。つまり、聖書に忠実に従うよりも、もう少し人間的にいろんな手を加えて、そして、より良いものにすればいいという考え方です。パウロは「この世と調子を合わせてはいけません。」と言いました（ローマ 12 : 2）。ヤコブも「貞操のない人たち。世を愛することは神に敵することであることがわからないのですか。世の友になりたいと思ったら、その人は自分を神の敵としているのです。」（ヤコブ 4 : 4）と言っています。つまり、私たちはこの世の知恵と聖書をミックスするのではないということです。私たちの神の前における責任というのは、神のおことばをその通り受け取って、このことばに何もかも付け加えることなく、この神の真理を正しく伝え続けていくことです。この真理に従い続けて行くことです。

残念ながら、このように教会の中に入り込んで来た人たちは、聖書だけではなく聖書に何かを付け加えようとするのです。バークレーはこのように言っています。「ニコライ派の誤りは、世をキリスト教の水準までに引き上げるのではなく、キリスト教をこの世に適用させようとしたことにある。」と。私たちの信仰を世俗化するのです。そのために様々な妥協を許すのです。この世の知恵や考え方、流行、そういうものに私たちは関心を示してはならないのです。

このペルガモ教会の大きな問題は、みな皆、このような誤った教えを信じていたのではありません。先ほどから見てるように、この教会はすばらしい教会でしたが、教会の問題はこのような考え方を持っている人たちを何もしないで許していたことです。本来なら、そのような人たちに対して「あなたたちは間違っている。」として悔い改めを勧め、もし、悔い改めなければ戒規をしなければいけなかったのです。でも、彼らはそれをしなかったのです。だから、主が心を痛めておられました。罪を容認すること以上に神を悲しませることはありません。私たちにとって必要なことは、私たち自身が罪から離れることであり、そして、このキリストの教会が罪から離れることです。

私たちはみな、罪深い者です。でも、罪を犯すなら、それを悔い改めて主の前に正しく歩んでいこう

とします。残念ながら、この教会にはそういうことがなされていなかったのです。もし、教会がみことばを正しく学びその教えに忠実に従い続けることよりも、他のことに関心を向けているなら、世の影響を受けていると言っても過言ではありません。教会の最大の関心事は、人の目を引くような美しい建物でもないし、キリスト教会において今流行っているプログラムを導入することでもないのです。自分自身が主のみことばに従っているかどうか、そのことをしっかり吟味しながら、みことばに従い続けていくことです。教会として、神のみことばに従い続けていくことです。なぜなら、教会とは、神の目的のために神によって選び出された者たちの集まりだからです。ゆえに、私たちの目的はただ一つです。この私たちを選び救い出してくださった偉大な神の栄光を現わすことです。滅びに至って当然の私たちを救い出してくださったこの神の愛とあわれみ、その恵みのすばらしさを私たちは示すことです。そのためには私たち一人ひとりの関心が、この主のみことばだけに向くことです。私たちが神のことばを見て「この神のおことばに従って行こう！」とし、感謝なことに、その助けを神が与えてくださっているから、私たちはそうして歩いていこうとします。

このペルガモ教会には悲しい現実がありました。すばらしい信仰者でありながら、神が悲しまれるような世俗化した教え、この世の知恵というものを許してしまったということです。そういった教えが教会の中で広まることを許してしまったということです。皆さん、そのためにはもちろん教会のリーダーも、そして、私たち一人ひとりが十分に注意しなければいけません。人間的に立派だと言われる人はいろんな教えをするかもしれません。でも、私たちにとって一番耳を傾けなければいけないこと、私たちが聞かなければいけないメッセージは「神のメッセージ」です。聖書が私たちに何と教えてくれているのか？それが私たちにとって最も大切なものです。この教会の問題はそこにあったのです。

C. 主の警告 16節

ですから、16節には主の警告が書かれています。「だから、悔い改めなさい。もしそうしないなら、わたしは、すぐにあなたのところに行き、わたしの口の剣をもって彼らと戦おう。」

1) 悔い改めへの勧告

「悔い改めなさい」とあります。

2) 悔い改めに対する警告

もし、その罪を悔い改めなければ、神ご自身がその人たちと戦うと言います。彼らにさばきを下すということです。このような誤ったサタンの教えを奉じている人々、そのような教えを教えている人々、その教えに従う人々に対して、このさばきが警告されています。罪から離れなさい、悔い改めなさいと。

D. 主の約束 17節

1. 主のおことばに耳を傾けること

17節「耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。」とこのように主の使信は締めくくっていきます。主のことばに耳を傾けなさい、主のメッセージに耳を傾けなさいと。

2. クリスマンに対する主の二つの約束

「わたしは勝利を得る者に隠れたマナを与える。また、彼に白い石を与える。その石には、それを受ける者のほかはだれも知らない、新しい名が書かれている。」、「勝利を得る者」とはクリスマンのことです。クリスマンに祝福が約束されました。主の二つの約束です。非常に難しい箇所に差し掛かっていますが、はっきりしていることは、主イエス・キリストを信じる者たち、主イエス・キリストに忠実に従っていく信仰者に対して、神はすばらしい約束を与えてくださっているということです。

1) 「隠れたマナ」を与える

今の私たちにはよく分かりませんが、この当時の人たちにはよく分かったことです。「マナ」というのは主がイスラエルの人たちに与えた食物でした。皆さんよくご存じです。出エジプト記16章に出て来ます。でも、それは隠れてはいませんでした。人々の前に降って来ました。では、この「隠れたマナ」とはいったい何のことでしょう？恐らく、契約の箱の入っていたマナの壺と関連しているのではないかとされています。思い出してください。契約の箱の中にはアロンの杖と、マナを入れた壺が入っていました。自分たちがこうして荒野にあって神によって満たされて来た、必要な食物が与えられて来た、そのことをその後も覚え続けるためです。黙示録11:19には「それから、天にある、神の神殿が開かれた。神殿の中に、契約の箱が見えた。また、いなずま、声、雷鳴、地震が起こり、大きな雹が降った。」と書かれています。天にある契約の箱のことです。その中にマナが入っている壺があるということです。私たち信仰者は、この当時の人々も私たちも、この救いに与っている者たちは、天にあってすばらしい祝福の中に招き入れられるということです。地上に契約の箱がありました。彼らはそれを見る時に神がこんな祝福をくださったことを覚えました。天の契約の箱はこうして神が私たちにいのちのパンである主を与えてくださり、それによって私たちが生きる者にされた、そのことを覚えその神に感謝するという、その意味でこのことが記されているのではないかとされます。

また、ラビたち、ユダヤ教の教師たちが語った興味深い伝承を紹介します。バークレーがそのことを記していますが聞いてください。紀元前6世紀の始め、ソロモンの建てた神殿が崩壊した折、こういった伝承があったと言います。「エレミヤはマナを入れた壺をシナイ山の亀裂に隠した。そして、メシヤが来るとき、エレミヤも再び現れて、隠したマナの壺を取り出すことになっている。そこで隠されたマナを食べるとは、メシヤの時代の祝福に与ることであるとユダヤ人は考えていた。隠されたマナを食べるとは、天国が到来してイエスがご自分の民のために祝福の宝庫を開かれる折に、新しい世界の祝福に入れられることを意味していた。」と。こういうユダヤ教の教師たちの伝承があると言うのです。恐らく、このことを多くの人たちは聞いていたのでしょう。ですから、ここで主がこのペルガモのクリスチャンたちに教えたことは、あなたたちにはすばらしい約束、祝福が天において約束されている。主イエス・キリストが来られた時に、あなたがたはそのすばらしい祝福に与るのだと、天におけるすばらしい祝福の約束、そのことがここで語られているのだらうと言われます。

2) 「白い石」を与える

もう一つの「白い石」も厄介です。非常に難しいことです。恐らく、この「白い石」というのは、ローマ帝国の人たちが度々、パンの無料支給や演芸等への無料入場券をもらったのですが、それを「テセラ」（白い石）と呼んでいました。丁度、チケットと引き換えるようなものです。それは白い石の形をしていたと、マスターズ神学校のトーマス先生はそのように言われます。恐らく、このテセラというものがあって、それを持っているとチケットと引き換えるように、それを渡すことによって、パンを支給してもらったり、いろんな所に入場することができたのでしょう。

そして、「名前が書かれた石」とは特別な催しへの入場切符だったようです。また、このような説もあります。競技で優勝した者には褒美としてこのテセラが与えられた。そのテセラをいただくことによって特別な祝宴に入る許可が与えられたと言います。

ですから、どちらにしてもこの白い石というのは、そのような祝福のところに居るためのチケットであると言うのです。そして、そこに「新しい名前が書かれている」とは、その人物がイエス・キリストに属していることを明らかにしています。勝利を得る者たち、つまり、クリスチャンたちの新しい名前がそこに記されていると言うのです。レオン・モーリス先生は「名前はその人の人格を表わした。その人物のすべてを表わした。ここで言われている新しい名前とは、新しい人格を表わす。」と言っています。それなら、私たちクリスチャンは、この当てもそうだし今も全く変わっていません。私たちに新しい名前が与えられた、つまり、私たちは新しく生まれ変わって新しい人格をいただいた。聖霊なる神は日々私たちに主に似た者に変えていってください。そして、私たちにはすばらしい白い石が与えられた。祝福に入るための切符です。まさに、私たち救われた者たちの姿を描いていると思いませんか？

イザヤ書62:2をご覧ください。「そのとき、国々はあなたの義を見、すべての王があなたの栄光を見る。あなたは、【主】の口が名づける新しい名で呼ばれよう。」と書かれています。そして、この17節には「彼に白い石を与える」とあって、「彼ら」とは言っていません。というのは、このすばらしい永遠の祝福というのは個人的なものだからです。この救いに与ったその人に与えられる約束だからです。

この17節で約束されていることは、「隠れたマナ」も「白い石」もどちらもクリスチャンに約束されているすばらしい永遠の祝福です。それをその当時の人たちがよく分かる表現をもって説明したのでしょう。いずれにしろ、このような約束がこのペルガモのクリスチャンたちに約束されていること、そして、今の私たちにも約束されているのです。

今日、私たちはこのペルガモの教会を見て来ました。神が私たちに何を望んでおられるのか？それは、私たちがどんな時でもこの神のおことばに従い続けていくことです。決して、この世と妥協することではありません。いろんな教えが周りに出て来たとしても、私たちはこのみことばに対して忠実であり続けることです。みことばに従うこと、それが主が私たちに望んでいることです。それ以外の方法で主を喜ばせることはありません。

忠実でありなさい！みことばに従い続けて生きなさい！と。それがこのようなすばらしい永遠の祝福を与えてくださり、私たちが新しく生まれ変わらせてくださった神に対する私たちの感謝です。感謝を表わす人としてぜひ歩み続けてください。すばらしい救いをくださった神を感謝しながら、このみことばに従い続けてください。そういう歩みをしていきましょう！そういう歩みを教会としてもしていきましょう！

《考えましょう》

1. ペルガモ教会が主から誉められた理由を挙げてください。
2. みことばの真理に対する妥協が危険なのはどうしてですか？
3. 救われた者に対して約束された二つの祝福を挙げてください。また、それぞれを説明してください。
4. 主のみことばに忠実にあり続けるために必要なことは何だと思いませんか？